



シンボリックな必需品とも、
道徳的な代物ともされるスーツ。
その歴史をたどり、
われわれの衣服の中にひそむ
性的・性的・社会的メッセージを読み解く、
歴史的な服装史！

性とスーツ

アン・ホランダール 中野香織＝訳

白水社 本体2,800円＋税

私たちが現在着用しているスーツが、
約2000年間にもわたって基本形を保っ
ていることは驚異だと、著者のアン・ホ
ランダールは書いているが、はたしてそう
だろうか。たしかに1789年のフラン
ス革命で、革命派のサン・キュロット派
がそれまでは労働者階級専用のものだった
短丈な長ズボンを初めてはいれたことに

よって、それまで腰から膝までのブリーチズ（フランス語でキュロット）とい
う半ズボンに長いストッキングを合わせ
ていた男性服が変わったとホランダールも
書いているが、じゃあ労働者階級と呼ば
れていた人たちは、男性服を着る人への
勘定には入れられてなかったのかとツツ
コミを入れたくなってしまいうほど、本書
は刺激的だ。著者は、ニューヨーク人文
科学研究所の特別研究員の美術史家。フ
ァッション史、服飾史としてまとめられ
た書物のほとんどは変遷の激しい女性服
に重点を置くものだが、この本のミソは
男性服のズボンを中心に書いていること
ろ。退屈で変わり映えないものと蔑ま
れていたズボンを、セクシーなものとな
え直して歴史を顧みることができたのは、
著者が女性だからだと言ったら差別にな
るだろうか。

